

NPO法人
「紀州熊野応援団」

昨年7月に内閣府からNPO法人の認証を受ける。観光・ツーリズム、新規産業支援など8委員会を設け、紀州熊野の活性化をめざす。事務所は、東京・大阪・和歌山県新宮市の3カ所。発起人は110人。理事長には、(株)長谷工コーポレーションの嵩聰久会長が就任。今年中に会員1,000人の結集が目標。

立ち上がった有志たち。 活気ある故郷をもう一度！

ふるさとを後にして数十年。都会で働き、高度経済成長を支えた紀州熊野の出身者たちが「ふるさとの衰退を何とかしたい」と立ち上がった。地方再生の「魁」をめざすNPO法人「紀州熊野応援団」だ。

ふるさとが 消滅してしまっ

東京湾に近いホテルの一室。和歌山県の新宮高校OBたちが集まっていた。(株)長谷工



Toshihisa Dake

嵩 聰久(だけとしひさ) 1941年生まれ。59年新宮高校卒、東京大法学部卒業後、建設省(現国土交通省)入省。91年(株)長谷工コーポレーションに入社、99年社長に就任し、経営危機に陥った同社の再建に成功。2005年から会長。

潜在的な 紀州熊野シンパ

紀州の偉人・濱口梧陵は、私財を投じてふるさとの復興に尽くした。現代の紀州人は「地域活性化の活動に新風を吹き込みたい」と意気込む。和歌山県だけでなく、三重県や奈良県の熊野出身者にも呼びかけ、百十人が結集した。主婦や年金生活者もいる。事務局長の鈴木拓(六七)は「観光振興、産品の販路拡大」、すべて市場は大都市。都会にいる我々が知恵を絞れば、必ず何かにつながる」と力の結集を考える。「空青し山青し海青し」と新宮出身の佐藤春夫は詠った。熊野の風土を色濃く映した中上健次文学の愛好者も多い。「熊野神社は



全国に勧請され広まった熊野神社。静かなたたずまいの境内が、都心のオアシスになっている。左から淵上、嵩、鈴木(東京都港区麻布台の熊野神社で)。

コーポレーション会長の嵩聰久(六六)が訴えた。「ふるさとの現状は都市との格差拡大なんて生易しいものじゃない。加速度的に進む衰退に歯止めをかけなければ、我々のふるさとが消滅してしまっ。残された時間は少ない」。大阪や名古屋からも駆けつけた同窓生の顔色が変わった。激論は六時間。「我々には、ふるさと

を元気にしたいという強い想い、そして培ってきた経験、人脈、知識がある。地元の間人と手を組めば、大きな力になる。できることからやってみよう」と、気持ちはひとつになった。

厳しい 地理的ハンディ

熊野。「奥まった所」を意味する隈(くま)からきた地名だ。古から癒しの地、蘇りの地として、熊野信仰は全国に広まり、そして、二〇〇四年には霊場・高野山などとともに世界遺産に登録

【紀伊半島南部の熊野エリア】
緑色が和歌山県域、オレンジ色が奈良・三重県域。高速道路等(赤い線)は、現在のところ熊野の入り口・田辺市までしか開通していない。



紀伊半島を縦断する熊野川。かつては木材運搬の大動脈として活用され、河口の新宮市には製材業や製紙業などの産業が発達した。

全国に三千社。紀州熊野シンパは日本中にいる」。全国にその輪を広げていく考えだ。

人の輪の架け橋に！

住民も自治体も頑張っている。しかし、県や市町村を越えた連携が薄く、分断されている。嵩は「ハブ崩壊後の自治体は涙ぐましい努力をしている。しかし、地元では隣町が何をしているかさえ知らない。我々が人の輪をつなぐ架け橋になり、地元の努力の隊列に加わりたい」と語る。広報委員長の高淵上洋治(五八)は「半分ふるさとを捨てて東京

に出たけど、今はふるさとが懐かしい。恩返しをしたい」と、連携を呼びかけてふるさとを回った。

地元もその熱意に呼応。中西洋(六七)は「都会の友の熱い想いに感激した」と地元のまとめ役として奔走する。活動はいよいよ動き始めた…。

地域再生の魁に

全国の地方でも衰退が進んでいる。「何とかしたいと思う人はたくさんいるが、行動にはつながっていない。我々は地域再生の魁になる」と嵩は力を込めた。ただ、短期間では難しい。「企

昭和三十年代まで林業を中心に栄えたが、紀伊半島最南部という地理的ハンディは厳しく、経済成長から取り残された。高速道路も未整備で、これまでに活性化のチャンスさえ与えられてこなかった地域だ。その中心・新宮市に三つあった製紙工場は今や一つ、製材所は百力所から十カ所に減り、人口は二十五年で三割も減った。「国土軸から大きく離れているから、戦後六十年、大きな工場立地がたつたひとつもない」。嵩はふるさとの状況を語る。

業再生は三年で完了しなければ、市場が許さない。しかし、地域の再生は半世紀、最低でも三十年かかるだろう」。ふるさとへの想いを次世代に引き継ぐ、そんな活動を切り拓くつもりだ。(敬称略)



津波から村人を救った「稲むらの火」 濱口梧陵 (1820-1885)

和歌山県広村(現広川町)に生まれる。紀州から銚子に醤油づくりを伝えた濱口家本家の養子となり、濱口儀兵衛商店(現ヤマサ醤油)の7代目を継ぐ。帰郷中、安政の大地震(1854年)により大津波が発生。梧陵は、村人を誘導するため、自家の稲むらに火を放ち、多くの命を救った。また、私財を投じて、被災した村人の家を建て、村の将来のため大堤防を築造した。小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)は梧陵を「A LIVING GOD(生ける神)」と広く紹介。また、耐久舎(現耐久中学・高校)を設立するなど、人材育成にも尽力。1868年、商人ながら紀州藩勤定奉行に任命され、藩政改革を推進した。1871年には初代駅通頭(後の郵政大臣)に就任。その後、初代和歌山県議会議長。